

SSKU

2022年度

お元気ですか？

秋号

イリアンソスです。



Page2 特集「秋野先生との座談会～利用者の意思決定を支える～」

Page6 活動報告

Page7 職員のひとことリレー

特集

秋野先生を囲んでく利用者の意思決定について考える

今回の特集は、社会福祉法人イリアンソスの顧問弁護士で法人の評議員も務めていただいている秋野達彦弁護士を囲んで座談会を開催しました。「意思決定支援」を話の軸にしながら日頃の支援について話し合いました。



参加者紹介

- ・秋野達彦 (弁護士・評議員)
- ・吉田遊佑 (生活寮そら)
- ・花形優 (活動センターかなえ)
- ・疋田史江 (なかまの家)

弁護士として障害のある人を支える

生活寮そら(グループホーム) ..

吉田

秋野先生が法人に関わるようになってきた経緯など教えてくださいいただけますか？

秋野弁護士

弁護士登録をして一年目。

当時の障害者自立支援法に対する全国で起こった違憲訴訟。私は東京弁護団の一員と

して参加させていただいていま

した。東京から原告となられた方の一人がイリアンソスの利用者さんとそのご家族でした。裁判に向けて、そのご家族と準備

をする時には磯部理事長が常に

傍でご本人とご家族のサポートをしてくれていました。違憲訴訟自体は、最終的には和解という結果となりました

た。その後、磯部理事長よりお声掛けをいただいて社会福祉法人イリアンソスの顧問弁護士をさせていただいています。同時に法人の評議員という形でも関わらせていただいています。

吉田 障害のある方を弁護するケース

は多いのでしょうか？

秋野 多摩地域は二十三区に比べると



秋野達彦 弁護士

障害者施設の数も多く自宅で暮らしている方も多いためです。それに比べて多摩地域を中心に活動している弁護士の人数は二十三区に比べると圧倒的に少ないです。その中で、違憲訴訟での経験や弁護団のつながりから、障害のある方たちの弁護をする機会が多くあります。

吉田 違憲訴訟が障害のある方を弁護するきっかけとなったのでしょうか？
秋野 もちろん違憲訴訟に携われた経験は大きいと思いますが、障害のある方の弁護をやっていきたくと思ったきっかけは、小学校時代に遡ります。小学校三年生の時、知的に障害のある子が隣の席になりました。隣の席ということもあり、サポートしたり行動を共にしたりすることが多く、ごく自然な感じで小学校時代を過ごした経験があ

りました。その中で、知的障害のある人は身近にいる存在であり、特別ではなかったです。そんな経験もある中で、障害のある方が社会の中で差別的な扱いをされたり、偏見の目で見られたり、近寄りたくない存在みたいな話を聞くとすごく嫌な気持ちになりました。そんな状況を変えられることであれば変えていきたいし、弁護士になったらそういう障害のある方の力になれるかなと思っていました。違憲訴訟の弁護団の事務局長、小学校時代の先生、知的に障害のある友人など、本当に色々な出会いがあつて今があります。

活動センターかなえ(生活介護)・花形

私はこの法人に入職するまで障害のある人たちと接する機会がほとんどなかったので小さい頃の経験や障害のある人と出会う場というのは大切だと思いました。利用者の意思決定の話になりますが、活動中にトイレへ頻回に行きたい？「本当に行きたい？一人になりたい？気持ちの切り替えたい？」トイレに固執しないように、違う作業に意識を向けたりもするが、果たして本人にとってよいのか悩みます。理由は

色々あると思いますが「行きたい」という最初の思いは尊重したいし。

日々、本人と色々な形でやりとりをしています。我々が“支援”としてやっていることが本人の選択の妨げになってしまっているのではないかと思ったりします。

なかまの家(生活介護)・疋田

支援の中で思うことは、日々の活動が“スムーズ”に流れていってしまいうことが本当によいのかを考えます。意識的に選んでもらう場面を作っていないと本人の気持ちの流れがいつの間にか感じます。職員間でも、「選ぶのは難しいよね」という到達ではなく、引き出し方を考えていけるようにしたいです。誰もが自分のことは自分で決めたいし、当たり前のこととして話し合いを深めていきたいと思っています。

吉田 グループホームは生活の場なので、自由に過ごしてほしいけど、七名の集団生活なので、ある程度の決まりや制約もあるのかなと思います。その中で、どの程度入居者の皆さんが自分のことを自分で決めているのか考えま



す。個の生活と集団の生活が混在して
いて、それぞれの心身の距離感も絶妙
に取っているように感じます。生活の
中での選択と決定を繰り返しているの
ではと思います。「意思決定」と言う
選ぶ支援みたいな印象を受けますが、
どれも嫌な場合もあるし、選べない場
合もあると思います。選んだ経験がな
い場合もあるかもしれないです。選択
肢が多すぎることも本人にとっては苦
痛なこともあるかもしれないです。

疋田 「選ばせてあげている」という
職員の満足感が終わってしまう危険も
あります。そういうところは色々考え

てしまいます。

花形 機会や経験の実践例で、家族か
らホワイトシチューが嫌いというとい
たBさん。グループホームに入居して
夕食にホワイトシチューが出たときに
あつという間に完食。よく聞くとご家
族が苦手で食卓のメニューに並ばなか
ったとのことでした。当然、本人の好
みや味覚の変化もありますが、先入観
に縛られると新たな挑戦の機会を少
くしてしまうという私の気づきの経験
でした。逆も然りです。好きだとそれ
だけになってしまうというように…。

秋野 日本弁護士連合会(日弁連)が
出している意思決定支援のガイドライ
ンもあります。まだまだ初期段階で
現時点での到達点といったところで
す。これから更に修正や改善が必要と
なってきました。意思決定支援は、悩み
ながらやっている感覚がまずは正しい
と思います。悩むということは、意思
決定ということを意識している表れだ
と思います。一番の問題は意思決定支
援という考えが最初から無く、いわゆ
る“代行決定”と呼ばれている方法で
支援者の価値観や考え方で「あなたに

はこれが一番良いです」「それが当然で
す」のように決めてしまうということ
です。意思決定支援の絶対的に正しい
答えを見つけようとする作業はいらな
いのではないのでしょうか。ガイドライ
ンなども自分の中に取り込んで自ら考
えながら場面、場面で意識するとい
うことが結果として意思決定支援にな
っているのではないのでしょうか。

疋田さんから、スムーズに流れてし
まう活動に引掛かりを感じるとあり
ましたが、それは意思形成支援の意識
を持って取り組んでいる証だと感じま
す。そのような過程がとても大切に
す。本人からの発信を受け止めて形に
していく。その過程が大切なように思
います。結果や結論よりも過程を重視
するべきだと私は思います。

疋田 偶然に「こっち」って言っちゃ
ったとか、また聞かれちゃったな…と
かでも、自分の意思を発信するきつ
けになっていくかもしれないと思いま
す。答えを探すとよりもプロセスが大
事。本当にそう思います。

吉田 代行決定に関連するところで、
障害のある人の言動が支援者の価値観

や考えの許容量からはみ出ると支援者の枠に抑えようとしてしまう傾向にあります。実は、はみ出たところにこそ真の要求があったり、その人の意思形成がなされていたりするのではないかと感じました。

秋野 そこに、ご本人なりの希望とか想いとかがあるとします。一緒に同じ方向に目を向けて、耳を傾けるということが大切かと思えます。

疋田 自分の人生を誰かに決めてもらうっていうのは嫌だし自分のことは自分で決めたいと誰もが思うことです。せめて一回は聞いてほしいし、決まっていることでも確認やお伺いを立ててほしいと思います。それは言葉の有無ではなく、自分の意思を無視されたくないっていうのは誰もが思う当然のことだと思えます。自分を飛び越えて勝手に決められてしまう人生は嫌ですね。

吉田 相手に聞くということは大切ですね。例えば外出の際に靴の履き替えで、支援が必要な方に靴を持ってきて履かせてしまうのではなく、「履きましようか?」「行きましよう」など一言添

える。相手に聞く、確認する。

秋野 そのことは誰にでも当てはまります。障害の有無だけではなく、子どもでも同様だと思えます。子どもの権利の第一人者である弁護士は自らの子育てで実践していると聞きました。こちらの都合や時間や予定もあるけども丁寧に関わっていくのは大事な視点です。全部をできないにしてもいくつかはできるかもしれない。

「自分は大切にされている」「自分の意見を聞いてくれている」という気持ちは誰もが嬉しいと感じる事ではないでしょうか。

どんな立場の方でも一緒になって考えて、最後は自分のこととして自分が決められた!ということを感じることが大切ではないでしょうか。それが堅苦しくいえば権利が保障されているということなのだと思います。

花形 一言声を掛けたり相手の話しに耳を傾けたり、行動を見守ったりすることは支援者として基本中の基本で根本のことだと改めて気づきました。「意思決定支援」というと何か特別な支援をしないといけない錯覚に陥ってしま

います。基本的なことですね。

疋田 「意思決定」という言葉で堅苦しく考えてしまうけど、今までに出た話は基本的なことだし、シンプルなことだと思えました。それが一番難しい事でもあるので意識していきたいと思えました。

吉田 利用者さんの気持ちを中心しながら、このように支援者が話をするのが大事だと感じました。皆さん、本日はありがとうございました。



入職式

二〇二二年度の社会福祉法人イリアンソス入職式を報告します。今年度は三名の職員を迎えることができました。理事長挨拶の後に一人ずつ抱負を発表してもらいました。新人研修を経て現場に入って頑張ってもらっています。五カ月経過しましたが、それぞれの部署で力を発揮しています。新たな職員は現場にも新しい風を運んできてくれることでしょうか。これからもよろしくお願いいたします。



前列左から (新人職員・理事長・新人職員・新人職員)

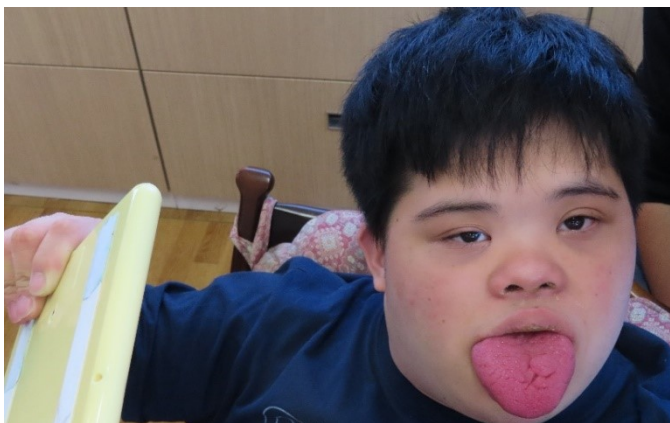


活動センターかなえ

活動センターかなえでは新しいなかまが増えました。西之原すなおさんです。東久留米特別支援学校を卒業され、四月より活動センターかなえに通所されています。

かなえの皆さんで入所者を祝う会をおこないました。各班でお祝いの飾り付けをしたり、似顔絵を描いたりしながら準備をおこないました。

お昼ご飯はお寿司や幕の内弁当を注文して皆さんで楽しく過ごしました。午後にはデザートを食べ、西之原さんの紹介をしたり、準備した似顔絵をプレゼントしたりしてお祝いをする事が出来ました。ますますにぎやかなかなえになりました。



▲西之原すなおさん

▼室内の飾り付けと似顔絵を描いてお祝いしました。





生活寮そら (共同生活援助)

安達聡(20年目)

「利用者にはより成長を求めるな。おまえの視点を常に変化させろ。そうすれば利用者の違った一面がみえてくる」
20年以上前、のぞみの家で働いていた時に当時の施設長だった磯部さんに言われた言葉です。当時を思い出すと苦いものがこみ上げてきますが、私の姿勢を見るに見かねての言葉だったと思います。

その後、紆余曲折を得て生活寮の仕事に付きましました。ともすると日常の積み重ねで終わりがねない寮での毎日。自分の支援が独りよがりになっていないか、不安に思う時もあります。
そんな時、職場の同僚(職員・パートさん)やご家族、もちろん入居者さんとのやりとりが、少々錆び付いた視点の可動域を動かしてくれます。利用者さんに限らず人の見方を一方的にしない事。コミュニケーションを大事に。この2点を大切にして日々仕事をしています。

職員のひとことリレー

VOL 11



このみ (放課後等デイサービス)

中西亮太(15年目)

何事も「自分も楽しむ!」ことです。自分の原点は保育士になる前にバイトしていた保育園です。性格だと思いがすが、一歩引いたところで見てしまうところがあります。手加減して遊んでいると子どもたちに怒られたり呆れられたり:本気で遊ぶことにしました。そうすると子どもたちも楽しんでくれるし、自分も楽しいのです。自分が本気で楽しむことで、自然と一緒に楽しいことができると思っています。

もう一つは感情表現することです。うまく「演技」できるかも感情表現の一つだと思っています。たまには本気になってしまうこともあります。:わかりやすく感情を伝え、支援にながればいいなと思っています。
今年十数年ぶりにこのみに“出戻り”しました。子どもたちの体力についていくのが精いつばいで、歳をとったなと感じてしまいますが、負けないよう楽しく仕事ができれば!と思っています。

前回、職員からのリレーです。
『仕事で大切にしていること』今回は、児童とグループホームの職員です。

ご寄付をいただきました(7月末まで)

法人各施設にご寄付をいただいております。誠にありがとうございました。

いただいたご寄付は法人各施設の充実や、将来構想の資金として大切に使用させていただきます。

小関友良 様

ありがとうございます。

社会福祉法人イリアンソス

●のぞみの家

東久留米市下里2-7-18

042-473-9027

042-473-9036 (F)

nozomi@iriansos.or.jp

●活動センターかなえ

東久留米市南沢2-20-51

042-452-6405

042-452-6415 (F)

kanae@iriansos.or.jp

●なかまの家

東久留米市中央町2-1-47

042-472-7130

042-444-3722 (F)

nakama@iriansos.or.jp

●生活寮「うみ」「そら」

東久留米市下里4-2-7

042-476-3400 (F兼)

sora@iriansos.or.jp

●生活寮「にじ」「かぜ」

東久留米市下里5-10-10

042-420-9943

kaze@iriansos.or.jp

●このみ

東久留米市幸町3-8-23

042-473-9667

～編集委員のつぶやき～

暑が続く中、元気に楽しそうな声が響きわたる子供たちがいる「このみ」の庭。コロナに負けないよ!と言わんばかりに今度は何をして遊ぼうか…と輝いた目。私たち大人も今を頑張って乗り越えようという気持ちにさせてもらっています。みんな、ありがとう!

津田雪枝(このみ)

《発行》

特定非営利法人障害者団体定期刊行物協会

〒157-0072 東京都世田谷区祖師谷3-1-1

ヴェルドゥーラ祖師谷102号室

Tel 03-6277-9611/Fax 03-6277-9555

《企画、編集》

社会福祉法人 イリアンソス

〒203-0043 東京都東久留米市下里2-7-18

Tel 042-473-9027/Fax 042-473-9036

《編集委員》

磯部光孝・多田由美・安達聡・津田雪枝

中西香奈・花形優・疋田史江・吉田遊佑

※ホームページからもご覧いただけます。

イリアンソス



定価100円

表紙の写真

生活の場面や作業所での場面です。コロナ禍でも地域の体育館やボランティアさんの力を借りながら新たな活動にチャレンジしています。